社会の一員として

富山県
婦中町少年剣道教室
中学２年　　中　村　真颯弥

令和６年１月１日。僕は祖母の家にいた。突然、大きな音を立てて家が揺れた。窓ガラスが割れ、水道からは泥水が出た。大きな地震は初めてだった。今まで何度も災害のニュースを見てはいたものの、どこか他人事で「自分は大丈夫。」という気持ちがあった。しかし今回ばかりは、当たり前だった日常が、あっという間に一変する現実を身に迫って感じた。日に日に明らかになっていく被害の報道から目を離すことができなかった。その中でボランティアを募集していることを耳にした。混乱を避けるため、県内の人でなければ参加できないということを知り、被災地に住む自分にも何かできるのではないかと考えた。

富山県の中でも被害が大きかった、氷見市の災害ボランティアに参加することにした。初めての仕事は一人暮らしのおばあさんの家の片付けだった。周囲の液状化した道路や倒壊した家を見て、「こんなところで僕にできることはあるんだろうか。」と不安になった。恐る恐る訪ねた僕を、おばあさんは笑顔で迎えてくださった。まだ余震も治まらず心細いと思われるのに、自分の不安を表に出さず、相手を思いやって敬意を払ってくださるおばあさんの姿を見て、いつも剣道で学んでいる礼節を大切にする心を見た気がした。その姿を見て不安が吹き飛び「今、自分にできる精一杯をしよう。それが相手に対する礼儀だ。」と強く思った。できるだけ笑顔を心掛け、気持ちよく思ってもらえるよう立ち居振る舞いを意識した。作業する中で、おばあさんは僕を見て、離れて暮らす孫を思い出して元気が出たと話してくださった。帰り際には、何度も何度もありがとうと言われた。僕も「ありがとうございました。」と心から伝えた。「こんな僕でも力になれることがある。」と感じることができて、自分の方こそ感謝でいっぱいだった。

その後も、予定が合えばボランティアに参加した。土砂の掻き出しや災害ゴミの分別など、大人の中に混じって活動した。僕は最年少だったが、高齢の人や女性よりは力があり、よく力仕事を任された。「にいちゃん、きっついね！なんかスポーツしとるがけ？」と声を掛けられ、「はい、剣道で鍛えてます！」と答えると、場が盛り上がってうれしかった。「きっつい」とは、富山弁で「力強い」という意味だ。たくさんの人と協力し助け合っての作業は、一体感や連帯感を強く感じ、剣道で仲間と一緒に稽古する心地よい感覚に似ていた。自分の中に確かに剣道で培ってきたものがあると感じた。

氷見市の避難所は、毎年、斎藤弥九郎大会が行われる体育館だった。僕にとって馴染みの場所であったが、とても大会が開けるとは思えない状態だった。「今年の大会は無理だ。」と思っていたが、なんと３月に大会が開催されることとなった。信じられないスピードだった。県内外からたくさんのチームが集まり、被害が大きかった氷見市で剣道できること

に感動を覚えた。僕がこの場で剣道できるのは、たくさんの人の支えのおかげであると感謝の気持ちでいっぱいだった。

震災という大きな困難を前にして、そこから立ち直ろうとする人々、それを支えようとする人々、たくさんの人の力があって一歩一歩復興へと向かっていることを体験した。そして微力だけれど、自分もその力の一つであることに誇りを感じ、社会の中でできることがあるという実感を得た。これからの自分は、自分のことだけでなく社会の中の一員であるという意識をもち、周りの人や、地域の人のために、自分に何ができるかを考えながら、一歩一歩前に進んでいきたいと思う。